

……†……………†……………
こうじ神父 聖なる三日間の説教
……†……………†……………

……†……………†……………
13/03/28(メルマガ No.641) 聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)
イエスは裂いて与えるほどの愛を示されたる
……†……………†……………

選ばれた福音朗読は、「弟子の足を洗う」場面でした。「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」(13・1)となっています。イエスの深い愛は、弟子の足を洗う場面と、このあとに続く最後の晩さんの場면을貫くテーマです。

弟子たちに注がれた「イエスの深い愛」を、何か違う言葉で言い表すとどうなるでしょうか。わたしは「御自分を裂いて与える愛」と表現したいと思います。

イエスは、「この世から父のもとへ移る御自分の時が来たこと」(13・1)を知った上で、弟子たちの足を洗っています。この世の別れを意識して取った一つひとつの行いは、本当は「胸を引き裂かれる思い」に基づいていたのではないのでしょうか。

イエスはご自分の深い愛を、さまざまな形で伝えます。弟子たちの足を洗う行為も、このあとに続く最後の晩さんもそうです。マタイ福音書によれば、最後の晩さんで、「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟

子たちに与えながら言われた」(マタイ 26・26)とあります。

引き裂かれたパンは、いわばイエス御自身です。御自分の体を引き裂いて、弟子たちのいのちを養うと約束してくださったのです。愛情深い親が、子に対してどんな苦労も厭わないことをだれもが体験しています。自分を引き裂いて、子供に良いものを与える経験があれば、イエスが示そうとしておられる深い愛も、よくお分かりなのではないでしょうか。

「引き裂かれる思いの中で弟子の足を洗う」「パンを裂いて渡す」イエスには、御自分の姿を弟子たちに受け継いで欲しいという思いがあったことでしょう。これまで、イエスが群衆の求めに応じる場面は、しばしば困難を伴う場面でした。

解散する様子のない群衆に食べ物を与えたり、叫びながらついて来る女性の願いを叶えてあげたり、近くの町や村を残らず回った上に、飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている群衆を見て、深く憐れまれたりといったことです。

もし決められた時間の中で活動しておられたら、「時間になったのでまた明日お世話します」という対応をしたかもしれません。イエスが語ったたとえ話の中にも、「もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません」と答えることもできるでしょう。

けれども、イエスはどんなときにも御自分を引き裂いてお与えになります。それは、とくに弟子たちに模範を示すためです。ゆだねられた羊を深く愛するとは、自分自身を引き裂いて与えることだ。それが、弟子たちに託した遺言

なのです。

もちろん、それが簡単なことだとは思っていません。わたし自身、仕事を中断したくないと感じているときに何かの用事に対応するのは辛いと感じることがあります。相手の立場に立ってあげられないことがあります。間違い電話が最近立て続けに掛かり、「大谷さんですか」という電話には、とうとう「ここは浜串教会だ」怒鳴ってしまいました。

そんな、欠点だらけのわたしたちに、イエスは御自分を引き裂いて与えるという模範を示してくださるのです。弟子たちの足を洗うとき、もはやこの世の別れだという引き裂かれるような思いがあり、最後の晩さんでパンとぶどう酒のもとに御自分をお与えになるときも、裂いて弟子たちに与えました。明日記念するイエスのご死去も、裂いて御自分を与えるその頂点だと思います。

裂いて与える姿は、弟子たちを極みまで愛するイエスによって示されました。イエスが、わたしたちの考え方や振る舞いの物差しです。わたしの物差しは、イエスが示す物差しと同じにできているだろうか。このミサの中で考えることにしましょう。

足を洗う式、「洗足式」がこの説教に続いて行われます。足を洗って奉仕する司祭も、洗っていただく信徒の皆さんも、イエスの深い愛、「裂いて与える愛」を学び合うことにしましょう。

…… † ……

ちょっとひとやすみ

…… † ……

▼ここ数年、聖週間の説教を「聖なる三日間の典礼」が始

まるまでに用意し、印刷して信徒に配ったりしている。もちろんこのメルマガを利用している人なら、パソコンから「話の森」ホームページに入ると、PDF形式での聖週間の説教をひとまとめにして受け取ることができる。

▼始めたきっかけは、わりあい高尚な理由だったと思う。

『聖なる三日間の典礼』に、すべてあずかることのできない人もいるに違いない。そういう人に、せめて説教だけでも届けたい。」最初はその一念だけで続けていたが、最近はどうでもない気がする。

▼それはつまり、「続けてきたからやめられない」「続けてきたのを中止して、みんなに何かを言われたくない」そんな低俗な動機に変わりつつある。本当に、読者の利便性のために続けているとは言えない気がする。

▼たしかに役には立っているだろう。前任地では教会の玄関にある説教プリントを手にとって「こんなことまでしているんですね」とたいへん喜ばれたこともある。だから結果的には意味あることをしているのだが、その何とというか、熱意が以前ほど湧かない。

▼けれどもこの取り組みは続けようと思っている。聖週間を自分自身実りあるものにする助けになっているのだから。だれかのために準備して、自分のためにもなっているなんて、こんなにありがたい仕事はそう見つからないはずだ。

▼何年も続けているから、そのうちに数年分まとめて見るのもよいかもしれない。自分がその年の聖週間にどんな過ごし方をしていたのか、そのあたりも見えてくるだろう。この時期がやって来ると、「あー、脇目も振らずに身を投じるのも悪くないなあ」と思う。

……… † ………

今週の1枚

……… † ………

第248回目。小さい写真だが、新司祭との共同司式ミサ。

<http://hanashi-no-mori.news-site.net/130328.jpg>

====-====-====-==== † 神に感謝 † ====-====-====-====

……… † …………… † ………

13/03/29(メルマガ No.642) 聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)

血と水が流れ、すべてを与えてくださった

……… † …………… † ………

聖木曜日に、イエスが弟子たちに示した愛を、「御自分を裂いて与える愛」と話しましたが、今十字架上でわたしたちのためにいのちをささげてくださいましたイエスこそ、「御自分を裂いて与える愛」そのものです。

十字架にはりつけにされたイエスは「兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出した」(19・34)とあるように、引き裂かれ、血と水とが流れ出て、全人類のために与えられたのです。

イエスは別のところでこう言っています。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ 3・16) しかもその与えかたは、「御自分を裂いて与える」という痛みを伴うものでした。

人類を救うために、痛みを伴わないで御自分を与え、救いのわざを完成することは可能だったのでしょうか。わたしは、痛みを伴わない愛は考えられなかったのではないかと思います。

今日の福音朗読の中に、イエスを知らないと言うペトロ

が登場します。不正な裁判を起こした宗教指導者たちがいます。また兵士は平手でイエスを打ち、ピラトはイエスを死刑に引き渡す裁判に加担し、その上イエスを鞭で打たせました。槍で、イエスのわき腹を刺した兵士もいます。

この人々をゆるし、救いに導くためには、痛みを伴わない愛は考えられなかったはずです。イエスはこうして、どんな人をも救うには、御自分を引き裂いて与える愛、痛みを伴う愛が必要だと教えているのです。

わたしたちは、イエスの愛によって救われました。御自分を裂いて与える愛によって、いのちが繋がりました。そうであるなら、わたしたちは「自分を裂いて与える愛」を学ぶ必要があると思います。痛みを伴う愛を避けては通れないと思います。

では実際の生活はどうでしょうか。痛みを伴うのはゴメンだ。自分を裂いて与えるのは勘弁して欲しい。わたしたちは自分を痛めてまでは、愛を分け合えない弱い存在ではないでしょうか。

わたしたちは、自分を裂いて与える愛にたどり着いていません。そうであるなら、せめて御自分を裂いて与えてくださったイエスに、心からの礼拝をささげましょう。ゴルゴタの中央にあるいのちの木から、イエスが御自分を裂いて与えてくださったので、わたしたちは罪がゆるされ、救われたのです。

このあと、十字架の礼拝をいたします。人間の罪をあがなうために、痛みを伴う愛をなかなか実行できないわたしたちの救いのために、イエスは十字架にはりつけにされました。心からの礼拝をささげて、イエスの前にへりくだりましょう。せめて、わたしたちの心を裂いて、イエスにすべてを委ねましょう。

……†……

ちょっとひとやすみ

……†……

▼生と死の境目は、そんなに極端な切り替え作業をする場所ではないのかも知れない。わたしが知っている何人かの人は、集中治療室にわたしがたどり着いて間もなく医者から「〇時〇分、ご永眠です（ご臨終です?）」と宣告を受けた。

▼かつてわたしの中では、生死の境目というのはかなりはっきりしていて、とても大きな変化がそこで見られるものだという思いがあった。言ってみれば、生きている人が突然死体になるような、そんなものだと思っていた。しかし事実はそうではなかった。

▼わたしが父を看取ったときもそうだったが、さっきまで息をしていたのが呼吸が亡くなり、死の宣告を受ける。体はまだ温かい。手を握ろうと思えば握ることもできる。だがその相手はすでに死亡していて、徐々に、死体になっていくのである。

▼本人にとっての、生死の境目はどんなものなのだろうか。もしかしたら、「あれ、今死んだのかな?」くらいの変化しかないのかも知れない。突然の停電のような変化ではなく、痛みが感じられなくなったり、手で触る感覚がなくなったり、そうやってゆっくりと「死んだのだな」と納得するのかもしれない。

▼初めて聞く人はビックリするかもしれないが、病者の塗油は仮に本人が医者から死の宣告を受けても、体が温かいうちは（1時間くらいか?）秘跡を授けることになっている。医学的には死の宣告を受けているが、魂はゆっくりと肉体を離れる、ということなのだろう。

▼時に病者の塗油を授けに行く司祭は、残酷な場面に遭遇することがある。秘跡を授けている間に容態が急変し、医者から宣告を受けたりする。すると、家族は泣いている一方で、秘跡を授けに来た司祭に感謝の言葉を述べなければならなくなる。

▼司祭も、医学的には間に合っていない場面で授けているとき、かける言葉が見つからなかったりする。生死の境目では、神だけがふさわしい言葉を知っている。神だけが知っているふさわしい言葉は何だろうと、たまに思い巡らすことがある。

……†……

今週の1枚

……†……

第249回目。断食（大齋、小齋）の日。フルーツ・グラノーラで過ごします。

<http://hanashi-no-mori.news-site.net/120406.jpg>

====-====-====-==== † 神に感謝 † ====-====-====-====

……†……………†……

13/03/30(メルマガ No.643) 復活徹夜祭(ルカ 24:1-12)

復活したイエスに出会えるのは「捜す人」

……†……………†……

主の復活、おめでとうございます。聖週間が始まる頃から、まったく声が出なくなり、復活徹夜祭の復活賛歌はどうなることかと思っていました（この原稿は24日に作成）。わたしの声も復活してハレルヤです。

さて今年の復活の喜びを、イエスを捜す人に光を当て

て考えたいと思います。まず婦人たちが、週初めの日の明け方早く、墓に出かけました。けれど墓にはイエスの遺体が見あたらなかったとあります。彼女たちは復活したイエスに会いに行ったのではありませんが、イエスを捜しに行ったのはたしかです。

そこへ輝く衣を着た二人の人が現れ、「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか」(24・5)と声をかけられました。イエスを捜しているのはよろしいが、生きておられる方を死者の中に捜してはいけないと言うのです。この場面も「イエスを捜す人」に大事な意味が込められていることを感じさせます。

婦人たちは墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせました。婦人たちの話を聞いた弟子たちは意見が分かれます。彼女たちの話をたわ言のように思った仲間と、ペトロのように婦人たちの話に動かされてイエスを捜しに行く人たちです。

わたしはこの「捜しに行く」という態度が、復活したイエスと出会うために大切なことだと考えます。与えられた朗読箇所の中では、婦人たちも、ペトロも、墓にイエスを捜しに行きましたが結局は見つけることができませんでした。

それでも、捜すことは大切なのだと思います。捜す人がいて、復活したイエスに出会うことができるからです。もしだれも捜さなかったら、つまり婦人たちも捜しに行かない、弟子たちもだれも捜しに行かなかったとしたら、イエスが復活したにもかかわらず、誰もイエスと出会わなかったかもしれませぬ。

日本の教会はこの点で歴史の中で大きな体験をしました。250年近く司祭がいない時代を信徒だけで信仰を守り抜き、プチジャン神父が大浦に派遣されたとき、イザベリナ杉本ゆりほか数名が、司祭を捜しに行ったのです。

捜しに行ったから、プチジャン神父と出会うことができました。捜しに行ったから、潜伏していたキリシタンは復活し、神の民の交わりを取り戻したのです。

一方で、司祭を捜しに行かなかった人々もいました。捜しに行かなかったのか、見つけることができなかつたのかは分かりませんが、捜すことをやめたために、復活の喜びを味わうことなく、今もひそかな信仰を守り続けています。これは日本教会の歴史に刻まれた悲しい一頁です。

わたしたちの生活に踏み込んで考えてみましょう。わたしたちも、復活したイエスに出会うために、「捜す人」でなければなりません。生活と信仰の結びつきを、自分に備わっている才能と信仰の証しとの接点を、教育や価値観と信者としての生き方を。こうした現実社会と信仰の接点で、イエスを捜し求める人でなければ、復活したイエスに出会うことはないのです。

今の生活があるのはだれのおかげだろうか。今の生活を、だれに一番感謝すべきだろうか。そういうときに、捜し求めていって復活したイエスのおかげだ、イエスにいちばん感謝すべきだとの答えにたどり着くでしょうか。

わたしの才能や特徴は、聖書の登場人物ではあの人に似ているかも知れない。聖書の中でその人はこんな働きをしたのだから、わたしも教会の中で同じようにイエスのお役に立てるのではないだろうか。才能や特徴からイエスを捜し求めることもできます。

日常生活のまっただ中で、わたしたちはイエスを捜し求める人になることができます。こうして、頭の中だけでなく、生活の中でイエスを捜し求めるなら、わたしたちは復活したイエスと出会うでしょう。復活したイエスと出会い、喜びに満たされる生活に入っていく。そのための恵みを、今日のミサの中で求めましょう。

…… † ……

ちょっとひとやすみ

…… † ……

▼御復活おめでとうございます。これからもたくさんのメルマガの読者と twitter や facebook の方々とのふれあいがあるって、充実した日々を過ごしていきたいと思っています。もう十分暖かいので、マラソンも復活しなければならないのですが、まだ冬眠しています。

▼ボートのほうは、4月にもなることだし、陸揚げしている「さざなみ号」を戻して、ボート釣りに行こうと思っている。釣りは例外はあるとしても、たいてい「見えない相手との駆け引き」をする楽しみがある。

▼魚が口を開けるのを見ながらする釣りもあるかも知れないが、ほとんどは竿先の動き、手に伝わる釣り糸の微妙な変化で相手を捕獲するのだから、繊細な感覚が要求される。ぴくりと竿先が動いたのを、揺れる船上で捉えなければならぬ。あるいは、ほんのわずかうき上下したのを見逃さないようにしなければならない。

▼「魚の動きが読み取れるのに、なぜ教会の動きが読み取れないのか。」聖書の言葉をもじってみた。教会の動きは、「信徒発見 150 周年」である。250 年近く司祭がいなかったのに、信仰を守り伝え、司祭がやっと戻って、その司祭に自分たちが受け継いできた教えが間違っていないか確認に行った。

▼信徒が 250 年の歴史を繋いだ。司祭ではない。150 年経って、やはり信徒が信仰を受け継いでいくために、現代に何が必要かをもう一度考えるときが来ていると思う。これから長く司祭が与えられない教会もやって来るだろう。そんな厳しい時代を乗り切って、教会が復活するために、こ

のタイミングで何か手を打つべき時が来ていると思う。

…… † ……

今週の 1 枚

…… † ……

第 250 回目。司祭の日。金祝・銀祝・新司祭おめでとうございます。

<http://hanashi-no-mori.news-site.net/120407.jpg>

====-====-====-==== † 神に感謝 † ====-====-====-====